〔書評〕

森　納著『因伯くすり雑考』(一)(二)

本書は、因伯（現在の鳥取県地方）の薬史である。しかし、薬は医療に用いられるものであり、内容は薬史に限定されない。それ故、医療史とも言える。本書(一)の「はじめに」には「時代によってその医薬も地方の文化の発達、経済、政治に左右されて変化し、また薬種となる本草の地域性にも関係して、医薬の需要、供給も心ずしも京都、江戸と同一の傾向を示すとは言えない。近世以降に残されたこの鳥取県地方の僅かではあるが医療関係の資料にそのことを見出すのである」とあり、著者は、近年急激に減少、消滅する資料を現実に見て、その残された資料を整理し、まとめられたのが、本書である。

本書(二)の「あとがき」を見ると「近世から現代への歴史、ことに医療の歴史については、とかく上に立った視野から調査、研究がなされていた。そこで医療の原点ともいうべき庶民の医療史である民間医療についてこの地方の特異性をみた」とある。本書の内容は民間医療や売薬をも含んでいる。著者は、本学会会員であり、鳥取県で医業にたずさわるかたわら、医史学や地方史の研究をなさっている。著書には『因伯の医師たち』(昭五四)、『国府町の医業史覚書』(昭五七)などがある。

本書(一)は十七章からなる。(1)延喜式に現われた因伯の薬種、(2)因伯における採薬の歴史、(3)大同類聚方に書かれている因伯の薬方、(4)鳥取藩の薬業史概略、(5)本草学者大谷丹庵と旦庵、(6)「本草綱目啓蒙」に示された因伯の物産、(7)鳥取藩における薬草栽培と薬園経営、(8)鳥取藩内における富山売薬とその資料、(9)郡家、落岩の岡垣家、(10)「目ぐすり」とこの地方の眼科、(11)渡村、渡辺家の療痔疾秘伝書、(12)「偶中録」について、(13)因伯処方録考、(14)因伯の民間医療と民間薬、(15)因伯の牛馬の民間治療、(16)家庭薬全書の鳥取県関係資料、(17)鳥取藩の薬事年表

本書(二)は四章からなる。(1)神話にみる因伯の医薬の起源と問題点、(2)鳥取藩における採薬及び薬園経営と平田眠翁、(3)売薬の歴史と因伯の売薬、(4)因伯の薬種、(5)鳥取県内売薬一覧表

本書の内容は、テーマとして巾広く、時代的にも、近世を中心に、古代から現代に至る。しかし、その特徴は、資料にもとづき、出来るだけ資料を提示するところにある。本書(二)は(3)、(4)、(5)が大部分を占める。(3)では、四一の節を設け、売薬を紹介している。紹介された売薬の種類も多く、解説もかなりくわしい。宗田　一氏『日本の名薬』(八坂書房)と併読されるとさらによい。(4)は八五の節からなり、因伯産の薬種についてそれぞれ解説している。

江戸時代における因伯の本草家平田景順著『因伯産物薬効録』が昭和五七年に雄松堂から出版され、因伯の薬物、本草研究が知られるようになったが、本書の出現は、平田眠翁の業績を補うばかりでなく、現時点では因伯の医薬の全貌に迫るものであると思う。

本書は市販されておらず、参考、研究のため希望される方は、著者に直接問合せられたい。本書(一)三三四ページ、(二)三三〇ペー

ジ。一九八四年発行。
連絡先　鳥取県岩美郡国府町糸谷十一　森　納

（矢部　一郎）

中田瑞穂著『癲癇二〇〇〇年』

ドストエフスキー、ジュリアス・シーザー、ゴッホ等はてんかんであったことが知られる。てんかんは人口の一％弱が罹患することが知られており、単一の疾患としては大きなものの一つであるが、その歴史についてまとめられた書物は、従来日本では出版されていなかった。

新潟大学脳神経外科教授　故中田瑞穂氏が昭和四一年九月より外科治療に連載した「癲癇二〇〇〇年」という非常に長い論文があったが、今回てんかん患者の会である日本てんかん協会（新宿区西早稲田二丁目二番八号　電話〇三―二〇二―五六六一）よりこの論文が本にまとめられて出版された。

この本の第一の特徴は、てんかんの専門家によって書かれた論文であることである。そのため病気に対する見方が専門的で、正確で、信頼が出来る。例えば、最近もあるてんかんの歴史に関する論文で、著名な医史学の専門家が、「唐代の『備急千金要方』中にてんかんは先天性疾患であると書いてあり、すでにこれは正しい。」と書かれているが、私の岡山県におけるてんかんの神経疫学的研究（一九八四）でも、素因性のてんかんは二〇％にすぎず、てんかんの原因が先天的なものだけであるとは、てんかん学者は誰も考えていない。こういう基本的な誤りは、てんかん専門家が書いたこの本はおかしていない。

著者は緒言で、「これはてんかん医学史といえる様な系統だった精密なものではない。そういいたくても私には医史学的な素養も能力もないのだから空元気だけでどうにもなるものではない。従って以下述べるところはてんかんの歴史的観察を中心にして居るには相違ないが、厳密な意味の医史学的著述ではない。いわば一種の自分勝手な心覚え的雑記にすぎない。」と述べている。著者にとっては専門家としての働きの間に趣味的に集めた史料を年代順に並べた論文であったので、その様に記載したのであろうが、実は専門家の目で見た立派な医学史となっている。

逆に余りにてんかん専門家の目にかたより、専門用語や古いことばづかいが頻発するため、読み易い文章であるとはいいかねるが、史料的価値は高い。

時としてこの種の本が、日本医史学会とは全く関係ないところで書かれ、発行されるという状態を、医史学会の一員としては一寸残念に思うが、この本を出版した日本てんかん協会のエネルギーと努力に対しては、てんかん学会の一員としては敬意を払わずにはおられない。

マイナーな出版社からの本のため、医史学会員の目につきにくいと思われるので、あえて紹介させていただいた。（石田純郎）

発売元　ぶどう社（〇三―二三四―一四五〇）　一九八四年八月発行　A五判　一二七頁　一八〇〇円。